

VU (絶滅危惧Ⅱ類)

コイ目 ドジョウ科

カテゴリー判定基準：A-2

アジメドジョウ

Niwaella delicata (Niwa, 1937)

旧レッドリストカテゴリー		
1991	1999	2007
—	—	VU

日本固有種

中部地方と近畿地方の河川に分布するアジメドジョウは肥厚した吸盤状の口唇を持ち、上中流域の早瀬から平瀬に生息する。春から夏には河床の付着藻類等を摂食するが、晩秋になると伏流水の湧き出る河床に潜って越冬し、春先に産卵する。多産地では漁獲されているが、河川工事等による河床の環境悪化により多くの生息地で個体数の減少や分布域の縮小が生じている。

The Ajime-loach, *Niwaella delicata*, is a species endemic to Japan, distributed in the upper and middle reaches of rivers in the Kinki and Chubu district. This species inhabits riffle or rapid areas, feeding on algae or aquatic insects on the stream bed using its fleshy sucker lip in spring and summer, and migrates in autumn to groundwater seepages for the winter. It lies dormant for nearly half a year and spawns in early spring. Fishermen exploit this behavior and set traps in spring and autumn. Populations of this loach have been decreasing due to the devastation of river environments.

基礎情報

■**形態** 体は細長くて、全長で8~12cm程度。体の大きさは雌雄や生息地で違いが見られる。体高が一樣で、背鰭、胸鰭、尻鰭が体の中央よりも後方にあり、鰭の長さも短いため、全体的に“ずんどう”に見える。腹側は白色、体側の中央部から背にかけて薄い褐色の地に暗黒色の複雑な斑紋がある。体側中央の斑紋は線状、点列状、鋸歯状など様々で、生息地によって差違がある。本種の特徴である肥厚した口唇は、半月形の吸盤状で流れの速い場所で吸い付くのに適応している。口髭は短くて3対。シマドジョウなどと似るが、吻に暗色斜帯がないこと、鰭の位置、唇の形状等で区別できる。

■**分布域** 中部地方と近畿地方の河川上中流域を中心に分布する。比較的水量のある河川に多く、細流や枝沢では見られない。ドジョウ科の中でもっとも高標高まで進出しており、木曽地方では標高1,200mあたりから生息する。

■**生息環境** 河川上中流の早瀬から平瀬にかけて生息し、浮き石が多く、空隙がある礫底を好む。成魚は流れの速い場所で見られるが、当歳魚は岸際の砂泥底や植物の根際付近に多い。河床表面で活動する時期には石についた藻類や水

生昆虫を摂食しているが、晩秋には伏流水の湧き出る河床に潜って越冬する。この習性を利用して、飛騨地方ではアジメ釜（うけ）と呼ばれる湧水トラップによる伝統漁法がある。アジメドジョウの生息河川では増水による河床の攪乱がしばしば起こるが、攪乱は河床の透水性や伏流水の維持に役立っていると考えられる。

■**生活史** 越冬のため潜った伏流水中で春先に産卵すると考えられているが、自然水域での観察例はない。孵化仔魚は産卵床内にとどまり、7月頃に河床に現れる。瀬尻岸際の緩流部で夏場を過ごし、成長するに従って流心部へと生息域を広げる。晩秋に水温が下がると河床表面から姿を消し、大きめの石の下に集まる。さらに水温が低くなると伏流水が湧き出る礫間に潜る。越冬場所には多数の個体が集合する。満2年以上で成熟し、湧水に潜る直前には成熟卵を持つ。体内卵数は2歳魚で平均100粒以下、3歳魚で平均150粒程度と他のドジョウ科魚類よりも少ないが、卵径は吸水時で約3mmと大きい。春先の産卵後、5月頃から河床に現れて活動を開始する。寿命は長く、10年以上生きるものも多い。なお、本種は体側の斑紋パターンから斑紋分散型と斑紋収束型の個体群に大別されており、遺伝的に差異があることが確認されている。

現在の生息状況

■**分布域の現況** 資料が少なく不明であるが、長期的にみると生息河川における分布域の縮小や支流レベルでの著しい個体数の減少が見られている。

■**生息地の現況** 地域別の状況は不明であるが、分布域西限の安威川や揖斐川のように生息域にダム建設が進められたり、護岸や砂防堰堤の工事などが行われているところもある。

■**個体数の現況** 現在の個体数やその動態は不明な生息地がほとんどであるが、主産地の岐阜県での漁獲量は減少している。また本種分布域西限の安威川では1960年代に比べて生息域が縮小している。

存続を脅かす要因

地域別の状況は不明であるが、生息地の多くでは生息環境の悪化が懸念されている。本種の隠れ家や越冬産卵場所となる石礫の間隙が、河川およびその周囲の工事や河畔林の伐採（11、13、23、24、25）による土砂流入で消失したり、河川改修による河床型の単純化で伏流水の減少・消失が生じている。また、砂防堰堤による上下流の分断が本種の移動を阻害している。その他にも水質汚濁(31)や漁獲が減少要因となっているとの指摘がある。

保護対策の現状

生息域のほとんどの府県のレッドリストで絶

滅危惧種等に選定され、保護の必要性が指摘されている。そのため、生息河川でダム工事や河川改修工事を行う際に、本種を採捕して移植したり越冬産卵場所となる伏流水の湧き出し口を保全するなどの事例はあるが、全国的な取り組みはない。岐阜県水産試験場（現岐阜県河川環境研究所）では長らく人工繁殖に取り組んでいた。

特記事項

とくになし。

参考文献

- 後藤宮子, 1996. アジメドジョウ. 水産庁(編), 日本の希少な野生生物に関する基礎資料(Ⅲ), pp. 188-193. 社団法人日本水産資源保護協会, 東京.
- 後藤宮子, 2001. アジメドジョウ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海(編), 日本の淡水魚: 第3版, pp. 395-397. 山と溪谷社, 東京.
- 平松和也, 2010. アジメドジョウの生息地保全に関する生態学的研究. 近畿大学農学部研究紀要, 43: 111-157.
- 平松和也・細谷和海, 2006. 大阪府安威川におけるアジメドジョウの河川内分布と生息環境. 魚類学雑誌, 53: 39-46.
- Kano, Y., 2000. Age and growth of the Ajime-loach, *Niwaella delicata*, in the Yura River, Kyoto, Japan. Ichthyol. Res., 47: 183-186.
- Kitagawa, T., T. Okazaki, M. Kashiwagi and M. Yoshida, 2001. Population structure and local differentiation in the delicate loach (*Niwaella delicata*) as revealed by mitochondrial DNA polymorphism. Ichthyol. Res., 48: 127-135.
- 駒田格知・鈴木興道, 1994. 揖斐川上流におけるアジメドジョウの成長について. 成長, 33: 5-11.
- 森茂寿・田口錠次・本莊鉄夫, 1974. アジメドジョウの増殖に関する研究 - II 河川における採捕について. 岐阜県水産試験場研究報告, 19: 9-17.
- 中賢治・立川互, 1987. アジメドジョウ. 内水面漁場環境・利用実態調査報告書 魚のすみよい川への設計指針(案), pp. 128-131. 全国内水面漁業協同組合連合会, 東京.
- 丹羽彌, 1976. あじめ アジメドジョウの総合的研究. 大衆書房, 岐阜. 226pp.

執筆: 平松和也 (大阪府立環境農林水産総合研究所)・北川忠生 (近畿大学農学部)